

研究通信

No. 34

1960.4刊

村落社会研究会
事務局

東京都文京区原町17

東洋大学
社会学部研究室

年次大会記 第VII回

一九五九年一〇月一九、二〇日

東京本郷「学士会館」にて

才七回大会の印象

有賀 喜左衛門

一九五九年度大会後拡大委員会の開かれた時、研究通信に今年の大会のしめくくり批評のようなものを書くように要請されたが、私は病後で研究発表を全部きくことができなかつたので、大会印象をかく適任者であるとは思つてない。したがつて私本位の感想をどまる。もつと多数の会員諸君と話合つて書いた方が実のあるものになると思つているが、時間の余裕もないで引受けた。

政治と村落という共同課題で大会が運営されたが、まとまつた焦点が結ばれなかつたようだ。前年の大会は村落共同体の概念を明かにしようとして、結局はまとまらなかつたとしても、鳴子温泉

で二泊して研究発表の外にかなりつつこんで討論をしただけあって相当に共通点も見出したし、収穫もあつたと思つた。今年の共同課題はその延長として村落共同体を成立させる一条件として政治がどんな作用を及ぼしているかを目標として共同課題が選ばれたはずだと私は思つていたが、今年はその点にはほとんどふれなかつたので問題点が別の方向に向いてしまつたような印象をうけた。

今年の大会において問題の焦点を結ばなかつたと私に思われるのは、單に去年の総会できめた共同課題の主旨がずれたというばかりでなく、ずれた為に主旨が消えて、政治と村落という主題を各人思いに選んだということにもあるようと思われる。もちろん各発表者の研究内容が悪いといつてはいるのでない。むしろそれの方のはいつた興味のあるものであつたと私は感心しているが、村落と政治との関係が多面的に説かれたので、討論において問題点を合せることが大変むずかしくなつてしまつて、散漫になつてしまつたと思つてゐる。

今年は大会に際して会員の研究発表の申込が非常に少かつたことが事務局を大いに苦しめた。これは共同課題がむずかしかつたから申込者が少かつたのか、あるいは其他に理由があつたかも知れないが、それらの事情から事務局がプログラムを作るのにひどく苦労しなければならなかつたことも、深く影響していたのであろう。ともかく今年の研究発表はこういう事情の下に行われた。個々の研究発表は持時間も比較的多かつたから、相當に力のはいつたものであつたのに、討論において一つの焦点に強く集中してゆく迫力に欠けたのは会員全体にそういう意欲が足りなかつたのではないかと思われて、研究発表者に対し申訳ない気持がする。次年度は大会の運営について会員全體がもつと積極的に参加してほしいと私は希望している。

村研は社会学専攻の者ばかりの会ではないから、社会学ばかり引合に出しては恐縮だが、少くとも農村社会学では従来は政治の問題に余りふれて來なかつたので、政治と村落という題目は苦手であつたように思われる。大島太郎さんのような政治学の専門家の主張を

開いていたと、大変歎切れがよくて、大島さんなりに一応はつきりした線が出ていた。こういう人が討論に参加してくれたのだから、もう少し共同課題を深めることができればよかつたが、力が不足していたようだ。大島さんの発言は明治以来の自治体が政府の政策の変化と共に地主本位のものから自営農民層本位のものに動いて来たことを説いて非常に興味があつたが、この説明を聞いただけ、この説に対する反駁も積極的支持もなかつたことが私の記憶に強く残つている。私達にとってこの説を肯定するにしても、否定するにしても、自治体の時代的変化の中で村落がいかにこれらの政策に反応して、村落の生活を替えて来たかを具体的に示さなければならぬ。我々は村落構造という言葉をよく用いて来たが、それを内容とする各種の家連合の内面的变化や相互関係を必ずしも深く追求でき

たのではない。したがつて村落の規定もまだ十分ではないように思われる。これを十分ならしめるにはその内部的分析だけでは足りないと思つるので、明治以来成立した自治体や農業団体、それらを通して及ぶ上級の政治や経済の制約を見た上で、村落構造の変化を深く見つめて行かねばならないと思つてゐる。

こうすることは政治学や経済学などのように全体社会の体制の研究が組織的に進んでいる側については、う程のこともないものであるが、そこでもなお個々の村落のモノグラフは必要な段階にあるのだから、共通の学び方の上で補足し合うことはできると思う。個々の研究についてのべることはできなかつたが、許して頂きたい。（一九五九年一二月二六日記）

二つの雑感

余田博通

十月十六・七日の日本社会学会のお世話を聞いて、殆んど研究報告を聞くことができなかつたが、たゞ二日目の第四会場を開くことができた。そのうち井森会員の「村落構造尺度作成に関する調査研究」は、いろいろな村があるという場合のいろいろな村の位置づけを、何とかやつてみたいという意図で考えられたものと思うが、私もかつて同じような意図から全く異つたやり方ではあるけれども、広島県について考え、自分で面白い結果がでたと思つていて、興味深く聞くことができた。インテンシブな調査と共に、種々の角度からこのような研究が進められると、

調査地の選定とか、調査した結果をどの程度まで敷衍することができるかという点で、得るところが大きいのではないかと思う。第一巻「農業集落の類型」なども、取扱い改めて検討して見る必要があるようだ。田原会員の「家連合と村落構造」ならびに

探本会員の「村落社会の構造分析に関する一つの提言」という報告は、鳴子大会の統きのような感じを持つたが、これらの報告を中心にして討論をもつと盛んにやるべきであったと思う。当日私は、あらぬことを口走つたか、兩者はどちらも明治前期の問題であつたから、も知れないが、今日になつてソラツラ顕めるは、私の不勉強な問題であつたから、興味深く聞いたし、またすぐれた報告であつたが、

と村落体制」、酒井・山下・大津会員の昨年

の日本社会学会に続く報告「部落日誌からみた村落「区」行政の一考察」も共に重要な論点を含んでいたと思うが、後者は私も目をつけていた部落日誌の研究だけに興味深かつた。

中村正夫会員の「地方自治の拡大と部落機能」を聞いているうちに、私は部落というものが分らなくなつてしまつた。何れも活字になつたものを拝見したいと思う。各報告は、それ

ぞれの論点から問題を出しておられたわけであるが、それそれがどのようにかみ合つてくるのか、自分でも整理してみたいのであるが、

それは角々容易ではない。

研究通信三三号で有賀会員は、「村落と政治の問題は村落内部の政治構造と全体社会の政治構造との相関している所にあるが、村落がいつの時代にもこの外部的規制に反応してそれ自身の内部構造を創り替えて来た経過をとらえる事が大切である」と述べておられ、また中島会員が「村と政治体制の結び付きを明らかにするには、多くの要因や変数が与えられておりますが、論議を集中的にし、また

研究通信三三号で有賀会員は、「村落と政治の問題は村落内部の政治構造と全体社会の政治構造との相関している所にあるが、村落

がいつの時代にもこの外部的規制に反応してそれ自身の内部構造を創り替えて来た経過をとらえる事が大切である」と述べておられ、

また中島会員が「村と政治体制の結び付きを明確にするには、多くの要因や変数が与えられておりますが、論議を集中的にし、また

研究通信三三号で有賀会員は、「村落と政治の問題は村落内部の政治構造と全体社会の政治構造との相関している所にあるが、村落

がいつの時代にもこの外部的規制に反応してそれ自身の内部構造を創り替えて来た経過をとらえる事が大切である」と述べておられ、

また中島会員が「村と政治体制の結び付きを明確にするには、多くの要因や変数が与えられておりますが、論議を集中的にし、また

研究通信三三号で有賀会員は、「村落と政治の問題は村落内部の政治構造と全体社会の政治構造との相関している所にあるが、村落

がいつの時代にもこの外部的規制に反応してそれ自身の内部構造を創り替えて来た経過をとらえる事が大切である」と述べておられ、

また中島会員が「村と政治体制の結び付きを明確にするには、多くの要因や変数が与えられておりますが、論議を集中的にし、また

研究通信三三号で有賀会員は、「村落と政治の問題は村落内部の政治構造と全体社会の政治構造との相関している所にあるが、村落

がいつの時代にもこの外部的規制に反応してそれ自身の内部構造を創り替えて来た経過をとらえる事が大切である」と述べておられ、

の感を深くした。

来年も再び政治と村落というテーマが選ばれるとすれば、研究通信の上で早い目に右の至とされるような形で示されている。

このような農業・農村問題の現実的かつ理論的な進展を前にして、われわれは村落研究

目とその掲載雑誌名を研究通信に特集してい

ただくと、地方にいるものにとつて大変ありがたいのですが、皆さんは如何でしょうか。

村落研究(会)についての感想

島崎 稔

前事務局としての事務的な大会の報告は、大会報告の要旨が参加しえなかつた会員にも

全部おくれられているし、大会における共同討

論会もここで特に報告するほどの所産をもたらされたとも思えないでの、ここでは省略し

たい。ただ、それにしても、会員外である干

葉正士氏・大島太郎氏・川口謙氏等の積極的

な参加によつて、大会テーマ「政治と村落」

を考へるうえに種々の示唆が与えられ、討論

も多彩にしたことにについて、あらためてこゝへ社会学が、かかるトピックを啟発的にとり

得ることはないであろう。町村合併・都市化等々から農村における動評斗争に至るまで、

論議がなされることが望ましいでしよう」と書

終えた現在一會員として、会の研究課題・研

究体制など全般について感じていることを書くことで、前事務局としての報告にかえさせ

照應する現実の農民層の動きについても、農

地法それ自体が一つの矛盾として、改革が必要とされるような形で示されている。

このように農業・農村問題の現実的かつ理

論的な進展を前にして、われわれは村落研究

の新たな体系化を真剣に考えなければならぬ

いような気がする。当面、農村社会学の場合に限つていえば、かつて、地主的土地所有を

その基盤とする身分階層制のイデオロギー的

表現として、同族結合が村落構造の基調として強く主張され、同族理論は農村社会学の背

骨をなしていた。農地改革によるその基盤の崩壊は、かかる理論体系をもほりくずしてい

るかのようである。それに代る新しい体系化の試みが結につかない無感が、村落研究会の空氣となつてゐるし、恒常的な研究組織一つ

もつてない窮屈においやつてゐるよう思えてならない。

勿論、新しい段階に即応したトピックは種

種存在し、その限りで研究者は調査対象にこ

とかくことはないであろう。町村合併・都市化等々から農村における動評斗争に至るまで、

これらのトピックがとりあげられる場合、そ

こにどれだけの論理的必然性が存在し、新し

い段階に即した問題意識が明確にされていた

か、甚だ疑問であった。正直にいって、帰る

については、久しい混沌の後に漸く最近、明確べき基本課題をもたないままの散發的な調査研究として、一休何をしようとしているのか

分らない場合すらあつたようと思う。町村合併の問題にして、地主制の崩壊ならびに工鉱業を中心とした異常な発展という新たな國家独占資本主義の段階に即応した地方行財政制度の創出として、権力の側から促進された末端行政機構の形態的变化の追求に終つたのでは意味が乏しいであろう。また、しばしばテーマとしてとりあげられる都市化・近代技術の影響といった問題にしても、内外資本の必然的な要請（例えは、朝鮮戦争を契機とする）による産業構造の高度化としての農業（農村へのシワ寄せの側面が具体的・論理的に把握されねばならない）

このような種々のトピックの背後に、われわれは、村落研究・農村社会学として究極的に明らかにすべき基本課題を理論的に確定することに絶力を擧げるべきである。わたくしは、農村社会学がひとつの科学であるからには、そこに何か解決しなければならない「問題」があるのだと思う。そして、農村社会学が社会科学であるからには、その「問題」は、そこには、今までもないことだが、資本主義の生成伴つて農村に起つてきた問題がそれなのだと思う。農民が村落共同体のなかで、自給経済に充足して再生産をつづけている限りにおいて、そこに社会科学として問うべき固有の問題はまだ理論的に存立していない（勿論、比較的にはとりあげられる）。このように考えると、なるならば、当面、農村社会学が問うべき基本

課題は「資本主義と村落共同体との関聯」のうちにあるといえないとあるうか。いかなるトピックが研究対象としてとりあげられても、先駆的にはそこに論理的に結びついてこなければならぬ。ところで、村落共同体は資本主義の発展によつて解体過程を早め、とくに農業の資本主義的発展によつて終局的に解体すべきものである。したがつて、農村社会学が問う村落は解体過程としての村落共同体であり、ここに農村社会学の基本課題は、本来的に、一つの矛盾を含んでゐるのであり、農村社会学の特殊科学としての所以ることにあるのだと思う。農業が資本主義化し、村落共同体が終局的に解体した場合、特殊科学としての農村社会学は固有の対象の喪失によつて、社会科学としての一級社会学に解消し、そこで問われるものは、理論的に、もはや、市場の社会的構造とか、労働問題とか、諸団体の問題等にである。

「資本主義の発展と村落共同体の解体」を結ぶ理論的な措定として明らかにすべき問題は、農民層の分解・農村の階級構造であり、農業生産内部における新しい生産關係の進展度を明確にすることが、この基本課題に答える道である。農地改革後の現在に即していえば、農地改革により地主的収取がなくなつたことは、農業技術の発展による土地生産力の上昇と相俟つて、農民の余剰を増大せしめた。蓄積された余剰が、漸く、農民の農業への投資を可能ならしめてきている。動力耕耘機の急速な普及は、それを示すといえよう。耕耘過

程でのこののような複数化は、労働生産性の上昇によつて、農民の労働組織を変化させざるをえない。家父長的な家族（「いえ」）の商業形態は解体し、二三男労働力はそこから解放されて賃労働化し、同一世帯にとどまりながら、家計にも農業労働にも疎遠になつてきている。農民の一層の經營拡大への志向は雇傭労働に頼らざるをえない形になり、ここに新しい生産関係生成の窓口が開かれるに到つてゐる。勿論、一方、全般的には未だ、かかる新しい生産関係の生成を阻止する条件としての「土地不足」、零細地片の土地所有・自作農的土地位の前近代的性格を重視しなければならないけれども、しかし、低い生産力の地帶・労働市場の狭隘な地域ほど、各階層にわたつての農民の土地要求はつよく、高い生産力の地帶・労働市場に恵まれた地域ほど、急速に地価が低下してきることを思うべきである（糸魚川にて）。

土地所有の主体としての家族から農業生産の主体としての家族へ、しかも家族的協業形態の解体。このような家族の構造変化は、それを単位とする村落の共同体的秩序とも必然的に關聯し、共同体的諸關係も新しい生産關係生成の道を開くべく緩慢してくるであろう。そのような土地所有を基礎として依然として維持されている共同體的慣行は、彼等にとつて「前代的な残りかす」として映るにちがいない（勿論、下層に滯留している零細農にと

つては意味を異にする）。現段階における農民の上昇への可能性を、勿論、楽天的に考えているわけではない。ここに、共同化・共同経営が必然的に日程にのぼつてこざるをえたかった理由があるのだと思う。共同体的關係についてさらにつけ加えておくならば、例えば、自給肥料用の林野の伝統的な共同利用組織のようなものと、動力具の導入にともなうその共同利用組織とが、たとえ形態的に同じであつても、その底に流れる変化をよく秤量しなければならない。それがおなじく下層への重圧を強いるものであつたとしても、その重圧は、共同体的秩序からくるものと違つた結果（分解の方向）を生みだしてくるであろう。家族・村落の形態論的見解では、新しい農村への胎動を決してとらえられないである。

アメリカ農村社会学は、政府の農政渗透の必要性と密接な関聯をもつて发展してきたとしばしばいわれているが、その農村把握の仕方が生態学的・形態論的などとまつていたことをよくよく考へるべきである。

以上、「恩つき科学」であつてはならぬといいながら、思いつくままに書いてきたが、最後に、基本的課題について一言繰り返され、農地改革後の半封建的農業構造の論証

材料にするという下火になつた問題意識に願えさせて貰きたい。「村落共同体」をわれわれは、農地改革後の半封建的農業構造の論証

進んで農村社会学体系化の起点として、把握しなおすべきだろうと思う。このよう明確

な論理的な拠点をもつてこそ、農村社会学が社会科学のなかでレーヴン・デールと使命（文字通り歴史的使命になる訳だが）とをもつてゐるにちがいない。一つの夢、全国数ヶ地点の拠点（日本の資本主義の發展過程における）を選び、二～三年計画で、史的分析ならびに現状分析による「日本資本主義と村落共同体」という成果が、村落研究会の共同で問えないものだらうか。研究体制の充実化もそのような時に達成されるであらう。与えられたものをうけるだけでは、容易に發展の途をつかみえないことは、農地改革後の保守的な農民がよくその例を示している。

会 記 事

一、次期大会の課題の件

これについて本年度の課題の継続が一般の賛同を得、それに附帯してさらに若干の限定を加えること、

年報を一ヶ月ほど早く刊行されるよう努力してこれを大会のテキストにすることが提案された。

二、研究通信に関する件 年四回の発行を吉

らに強力に推進するため会員の自発的な寄

稿を促して原稿の集まりをよくすること、

これに附帯して各地区の活動を全国的に推

進するため、連絡機関としてのプロソク毎

の窓口（左記）の再確認とこの利用をする

ことが計られた。

かるために普通郵便で送金するものや大会時払込などが一般的となり、そのため口座を利用する者が殆どなくなつたため残金は一般会計に繰込んで廃止することに決められた。

二、次期事務局の件 総会までに確定され

おらず、東洋大学が有力候補として終始あ

げられたが、東洋大学側の都合によつて決

定をみず委員会に決定を附託された。

一、次期大会開催地の件 従来通りの隔年地

方開催と、前年度の鳴子の合宿大会の好評

だったこととの理由により、後藤、神谷両

会員の好意によつて、愛知県で合宿方式に

より開催されるよう実現を計らう旨発言が

あり全員の賛同を得た。なおこのための連

絡窓口は愛知学芸大後藤和夫死にきめられ

た。

一、前年度事業報告、会計報告のほか主要な議題と論議内容とは次の如くであつた。

二、振替金日産廃止の件 村研の振替口座

は会員の会費払込の便を考えて設けられた

ものであつたが、事務局が一年毎に移るた

めの連絡の不便、現金為替の方法がその後

設けられたこと、年間会費わずか三〇〇円

の送金のための送金費がその二割ほどもか

東北地区 東京地区 中部地区 関西地区 西部地区

仙台

東京

福武

直美

内藤

川越淳二

中島龍太郎

福岡

内藤

堀内

利美

会計報告

大會討論原稿

謝金

同

紙代

三二号

一六〇〇円

二四〇〇円

一六〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

一四〇〇円

一〇二〇円

二九〇〇円

一一九〇円

三六七五円

一〇〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

費納入状況の資料が示されたことに関連して、会員納入促進の件、会員整理の件、年報配布制による会費値上の件などが論議されたが結論はみなかつた。

(前事務局田野崎記)

× × × × × × × × × ×

× × × × × × × × × ×

事務局を引受けて

米林富男

収入の部

一一二五八円

二五六〇〇円

三一年分

一名

二〇〇一

(不足一〇〇)

三二年分

五名

一五〇〇一

三三年分

七〇名

一〇〇〇一

三四四年分

一〇〇〇一

(不足一〇〇)

三六七五八円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

二九〇〇円

昭和十年ごろ、いまは故人となつた及川宏君や北山正邦君達と、鈴木栄太郎先生のお供をして農村調査をはじめてから、はや四半世紀がすぎた。その間に長い戦争がつゞいて、日本農村の実証的研究におきな障害となつたけれども、有賀喜左衛門氏や喜多野清一氏らの努力で、この地味な骨の折れる研究はつけられ、他の学問分野の農村研究とも連絡がとれるようになつて、すくなくとも日本の社会学の分野では、家族・村落の研究だけは他の研究にくらべてすぐれた業績をのこしてゐる。昭和十三、四年頃社会学関係者だけは実証的な研究をあつめた「家族と村落」を出版した當時をかえり見てまことに感慨にたえ

ない。
戦後の村落研究のめざましい発展は、占領下C.I.T.の刺戟はあつたとはいゝ、何といつても村落研究会のメンバー達の功績といふねばならない。特に戦前はあまり頗れなかつた漁村の研究が活発になつたことは、戦後の村落研究のひとつの特色ではなかろうか。そしてこれらの研究が、農地改革や町村合併などのような戦後村落の実践的な課題と結びついてすゝめられていることも特色であろう。したがつて、これらの研究は社会教育活動や新生活運動にも貢献するところはすくなくない。だが、村落研究がこうした方向をすゝむにつれて、国外の村落研究や農村問題にも眼を開ける必要があるのではなかろうか。こうした国際的視野に立つてこそ、はじめて從来の日本の村落研究は一層その精彩をはなつことになるのははなかろうか。

あらたに鈴木栄太郎教授をむかえて東洋大学に社会学部が設けられた機会に、村落研究会のお世話を引受けることになつたのも深い因縁であろう。たゞ設立日の浅い学部内の整備に忙しい私達に、この光榮ある任務を充分にはたしめるかどうか、ほなはだ自信がないことに、この大学の社会学部でこの仕事を担当することが、他の学問分野との連絡に円滑を欠くことのないよう自戒するとともに、特にこの点について会員諸賢の御協力をおねがいしたいと思う。

◇ 年報・課題委員会 ◇

十一月十八日、本郷学士会館において、福

武委員の「スライドによるイタリー・フラン
ス農村踏査報告」が行われたのち、拡大委員

会が開かれた。有賀喜左衛門・福武直・中野

卓・島崎稔・田野崎昭夫・松原治郎・蓮見音

彦・園田恭一、新嘉務局から米林富男・藤木
三千人出席のもとに、次のこと事が協議され決
定された。

上　才七回大会の共同討議の録音について

は、事務局でその要点のみを摘要、それ
を研究通信に掲載する。

2. 今年度の年報編輯内容については、東

年度大会の共通テーマも七回大会と同じ
く「政治と村落」にしほることに関連を

もたせて、その項目がきめられ、執筆を
依頼する方々も一応次のように内定した。

〔新入会員〕

仮題「政治と村落」(各三〇枚・四〇枚)

明治以前

明治後期

大正・昭和(戦前)

昭和(戦後)

農政

法 律

渡辺洋三

中村吉治

神谷力

輝峻衆三

河村赳望

鈴谷赳夫

大内力

有木純善

山形大学農学部林政学研究室

社会学(園田恭一)・経済学(常盤政治)

法律学(未定)・民族学(野口武徳)

歴史学(稻垣泰彦)・地理学(松村紹一)

京都府立大学社会人類学型研究室

北海道学芸大学函館分校

吉田裕 明治学院大学社会学部

中野区大和町四四八 才二清美莊

山本傳史 東京教育大学文学部社会学科

板橋区常盤台四ノ一 桐花寮

岡部とし子 北海道大学文学部社会学科

歴史学(稻垣泰彦)・地理学(松村紹一)
社会学(園田恭一)・経済学(常盤政治)
法律学(未定)・民族学(野口武徳)
京都府立大学社会人類学型研究室

有木純善 山形大学農学部林政学研究室
鶴岡市新屋敷町一九

〔脱会〕
伊藤 章

〔名簿訂正〕

池田義祐 京都大学

京都市北区上加茂竹ヶ鼻三五

永田文夫 常滑市立西浦南小学校

愛知県常滑市坂井字向井三一

世田谷区松原町四ノ二八七荒木方

高橋明善

市川市北方町三ノ九三七

篠原武夫 東京医科大学

大田区本郷二ノ二四慈愛荘一〇号

安原茂

大田区本郷二ノ二四慈愛荘一〇号

大垣内昭雄 北海道学芸大学函館分校

吉田裕 明治学院大学社会学部

中野区大和町二ノ七 西村方

山本傳史 東京教育大学文学部社会学科

板橋区常盤台四ノ一 桐花寮

岡部とし子 北海道大学文学部社会学科

〔おねがい〕
○

次の年報に民族学の研究動向を載くことに
なりました。昭和34年4月から35年3月迄に
出されたものについて、なるべくもれなく取
りあげるつもりでおりますが、私の不注意で
氣付かずに見落すことがあるかも解りません
当期間中にお書きになられたものにつきまし
て、抜刷でもお送り戴けましたら、幸いに存
じます。

野口武徳(京都府立大学社会人類学型研究室)
現住所 三鷹市牟礼二三二三 北野方

◎ 年報・課題委員会記事

五月二日、東京大学福武研究室において、有賀喜左衛門・小池基之・福武直・大内力・中野卓・森岡清美・島崎稔・松原治郎・蓮見音彦・園田恭一、事務局から、藤木三千人、が出席のもとに、本年度二回目の委員会がひらかれた。議題及決定事項は次の通りである。

1. 前の委員会で主題目「村落と政治体制」

のもとに年報執筆者の内定をみたが、その執筆依頼交渉の結果は次のとくである。

○独立論文（各三〇～四〇枚）

明治以前 中村吉治 承諾

明治前期 神谷力 承諾

明治後期 大正・昭和戦前 河村望 承諾

昭和戦後 編谷赳夫 承諾

農政 大内力 承諾

法律 交渉中

○動向（各一〇枚）

社会学（園田恭一）・民族学（野口武徳）

経済学（未定）・法律学（未定）

歴史学（未定）・地理学（未定）

この交渉中及未定のところはそれぞれ委員が執筆依頼に努力し、次の依頼会（五月三十日）村研もいよいよ七年目をむかえ、会員諸氏迄に決定をみるようにする。

尚、今年度の年報は大会における共同討議のテキストにするなども関連して、なるべく大會開催一ヶ月前迄に発行されるようにもつて申有賀喜左衛門・小池基之・福武直・大内力・中野卓・森岡清美・島崎稔・松原治郎・蓮見音彦・園田恭一、事務局から、藤木三千人、が出席のもとに、本年度二回目の委員会がひらかれた。議題及決定事項は次の通りである。

1. 前の委員会で主題目「村落と政治体制」が、もとに年報執筆者の内定をみたが、その執筆依頼交渉の結果は次のとくである。

○独立論文（各三〇～四〇枚）

明治以前 中村吉治 承諾

明治前期 神谷力 承諾

明治後期 大正・昭和戦前 河村望 承諾

昭和戦後 編谷赳夫 承諾

農政 大内力 承諾

法律 交渉中

○動向（各一〇枚）

社会学（園田恭一）・民族学（野口武徳）

経済学（未定）・法律学（未定）

歴史学（未定）・地理学（未定）

この交渉中及未定のところはそれぞれ委員が執筆依頼に努力し、次の依頼会（五月三十日）村研もいよいよ七年目をむかえ、会員諸氏迄に決定をみるようにする。

も大いに張切ろうとしているが、この時期だけに、

話で愛知県の蒲郡ということになつていてが、会員の集り具合から考へて、一切の学
会が終つた十一月の中旬頃に東京でやつた方がよいではないかの意向が強く出された。
方があつたのであります。会員の皆様がたの叱正と御援助をお願いいたします。

昨年大会時には決定をみなかつた事務局をその後委員会の要請もあつて東洋大学でお引受けしたわけですが、性來の怠惰や不馴れやらの上に新設学部の難解とかけもちで、研究通信の発行もすつかり延引してしまいました。有賀委員や福武委員・前事務局から叱られ乍ら、村研大会の印象もすつかりうすれ去つた今頃になつてどうやら出来上つた次第で、この点会員の皆様方には種々御迷惑をおかけした事と存じます。

それに水をさす結果になりそうな気がして申金なく思つておりますが、幸い年報編集事務を島崎会員、田野崎会員でお引受け下さると申出もあり、委員会も事務局の非力を積極的に応援して下さるとの事なので大いに意をつよくしている次第です。

身辺の難事に追われて村研の仕事に専念出来ないことは残念ですが何とか十一月の大会までは皆様の協力を乞つておきたいと存じてあります。会員の皆様がたの叱正と御援助をお願いいたします。

次の三五号は六月下旬発行の心算りです。

◎ 事務局よりおわび

